

城陽市青谷での里山活動とまちづくり〈2021年度〉

龍谷大学・名誉教授・研究フェロー 里山学研究センター・研究員
好廣 眞一

今年度行った3つの活動、(1)城陽生きもの調査隊、(2)城陽市青谷地区における生物気候、(3)青谷らうんど、を報告する。前年に続いて新型コロナウイルス感染が暗い影を落とし、当初の計画を縮小せざるを得なかった。

(1) 城陽生きもの調査隊

2021年3月20日に事務局会議を行い、今年度の年間計画を表1のように決めた。

4月25日	総会、午後「天山ハイキングと山菜摘み」→総会のみ行う	
5月9日	木津川堤防植物調査	
(5月16日)	城陽パートナーシップ会議主催の生きもの観察会。水主神社～木津川	} 中止
5月29日(夜)	カエルの声を聞く会	
6月20日	ウメの収穫	
7月24日(夜)	宇治川河川敷でツバメのねぐら観察	
8月 日(保留)	中止	
9月12日	バッタとり(木津川河川敷)→中止	
10月17日	キノコ探し	
11月21日	カブト・クワガタ繁殖場作り	
12月 日	ムササビ観察会(上西先生の都合に合わせて)	
1月 日	土器作り1(福岡さんの都合に合わせて)中止	
(2月5日)	城陽パートナーシップ会議主催の野鳥観察会。古川周辺	
2月 日	土器作り2(および、子ども広場準備)	} 中止
3月 日	子ども広場	

表1. 2021年度年間計画

また、方針として当面、①食べものを提供する取組(山菜天ぷら)、身体接触を伴う取組(ジャンボブランコ)は中止する。②宣伝はニュースと口コミだけにし、地域紙への宣伝依頼はしない。③コロナV感染の再拡大がおきたときは中止することもある。京都府に緊急事態宣言が出された間などは中止し、それ以外は感染予防を充分に行う。

その後感染が進み、京都府が蔓延防止等重点措置地域に認定されたため、4-5月の野外活動は中止し、総会だけを行った。また2022年1-3月の取組も中止した。

月例会のうち、実施できた6月の「ウメの収穫」、7月の「ツバメのねぐら観察」、10月の「キノコさがし」、11月の「カブト・クワガタ繁殖場作り」、12月の「ムササビ観察会」について報告する。

① 6月20日「ウメの収穫」：参加者…こども8人、おとな15人、計12家族23人

今年度はじめての例会だった。10:10はじめの会で自己紹介。「注意するのはウメの棘で、軍手をはめて取りましょう」。まずクヌギ村の梅を。低い所はこどもたち、高い所はおとなたちが取って、落ちたウメはこどもたちが拾う。次は下の山内さんの畑へ。広い畑に低いのや高い梅の木あり。こどもたち低いの取ったあと、高い木のウメを脚立立てて取る。真剣だ。草っぱらではギリギリの若いメスとオス、若いショウリョウバッタ、ツチイナゴと次々見つけるこどもたち。マメコガネの死体も。取ったウメをポリ袋にまとめて入れ、重そうにくぬぎ村まで運ぶ。川原さんが取ってくれていた、くぬぎ村北のウメとあわせて62kg。去年は64kgだったから、同じくらいだ。1家族3.5kgずつ分ける。今日の感想。こどもたち、「ウメいっぱい取れて楽しかった」、「でかいウメがあった」、「バッタかわいい」。帰りにモリアオガエルの産卵を見る。小さい池の上に卵塊3つあり。こどもがヤゴの抜け殻を見つけた。

② 7月24日「ツバメのねぐら観察」 参加者…こども7人、おとな10人、計17人

春の子育てを終えた親ツバメと育った子ツバメは、6月ごろから集団ねぐらに集まり、しばらく体力をつけてから南の国へ渡っていく。宇治川観月橋下流のアシ原には、毎年大きな集団ねぐらができる。近鉄向島駅に17:30集合。自己紹介のあと、宇治川土手まで、田んぼ横の道を、田と水路の生きものを見つねながら歩く。18:00宇治川堤防に上り、下流へ。カワラヒワとウグイスなく。18:35アシ原のねぐらに到着。ツバメは上空に集まり出し、次第に数を増して飛び回る、空の一角を暗くしながら。その一団がアシ原のすぐ上を流れるように飛び出した。鋭く向きを変えるツバメ返しの早技。すさまじい速さでアシ原をかすめていたかを見ると、「今、入った!」と双眼鏡で見ていたこども。次々とツバメ集団がアシ原に飛び込んでいく。入ったツバメたち喧し。すごい数のツバメたちが矢のように飛び廻り、〈ザザッ〉とアシ原に消えていくすさまじさを久々に体験した。19:35「おわりの会」で感想を聞く。「たくさんツバメが飛んでいてすごかった」、「こんな近くに、こんなすごい所があるとは!新しい発見だった」と絶賛の声。19:43アシ原を出てもどる。19:20向島駅で解散。行きの土手歩きは涼しかった。沈む夕日を正面に見た。楽しかった。

③ 10月17日「キノコさがし」：参加者…こども6人、おとな9人、計15人

前日はしっかり雨だったが、朝には青空ひろがる。中向河原遊園地に集まったこどもたちは、枯木についたカワラタケを見つけていた。10時集合し、自己紹介。公園回りを探すも、キノコは他に見つからず。こどもが、ニシキマイマイとウスベニマイマイを発見。上の竹林に入ると足元にクリのようなキノコ。シロツチグリだ。たたくと胞子がホコリのように飛び出す。ヒイロタケ、アミスギタケとこどもたち次々に見つけていく。おとなより鋭い眼で、地面により近いことが効いているのか。

こどもたちは倒れた枯木にヒナノヒカリと、子のう菌のクロコブタケやニセキンカクアカビョウタケを見つけた。くぬぎ村下の竹林には、地面いっぱいシロツチグリ。こどもたち、たくさん集める。

くぬぎ村入口で、キノコ会の先達の久田さんがキノコ見つけて取る。くぬぎ村の広場にブルーシートを拡げて、それぞれ取ったキノコを、同じものを一緒にしてならべる。久田さんが種名を書いた紙を置いていく。全員集合したところで久田さん、今日見つかったキノコたちを解説。さっき取ったキノコを取り出して、「何でしょう?」。ナイフで切ってみると白い乳状の液体が。「チチタケです」。

終わりの会で感想。木場由喜知君(小6)「植物を見ていた。キツネノマゴは小さい」。「探すといろんなキノコが見つかるので面白かった」、「スッポンタケが見つからず残念」、「キノコいっぱい取れた」とこども。母は「子どもの眼には勝てない」。12:40解散。

④ 11月21日(日)「カブト・クワガタ繁殖場作り」：参加者…こども5人、おとな12人、計17人

10時、くぬぎ村ではじめの会。昆虫の先達武内さん、「くぬぎ村を多くの昆虫が暮らす所に変えていくように、2カ所で落ち葉堆肥を作っている。それぞれ掘ってみて、カブトムシ、クワガタムシ、その他の幼虫が入っているか見てみよう」。こどもたちすぐにセスジツユムシ、ウスイロササキリ、キリギリス幼虫を見つける。

おとな2人が大きい方の堆肥を掘り始めると、こどもたちスコップを手に加わる。かなり掘ってカブトムシ幼虫10頭ほど見つけ、さらに下へ掘り進め、次々見つけていく。「深い所までもぐってるんやな?」とこども。他のこどもたちは、中に入れておいた枯木を割っていく。クワガタムシ複数種の幼虫見つける。別の子はキマワリ、カミキリムシ、ハネカクシの幼虫、ゴミムシの幼虫?も。ナナフシや、マクラギヤスデ、ザトウムシも見つかった。

もう1カ所の堆肥には昆虫見つからず。イノシシが食べたか?発見した幼虫たちを飼育するこどもたちに分け、他は再び堆肥内に埋めた。昼食。見つけた虫たちの話題に花咲く家族ごとの食事。

食べたあとは、来年のために落葉集め。クヌギやコナラの枯葉が地面や山に散り敷いている。大きいポリ袋に集めて、堆肥の上に固めて置いては次々と踏み込む。ここでもこどもたちが嬉々として活躍。

終わりの会。こども「めっちゃ楽しかった」、「ナナフシはじめて見て良かった」、「カブト・クワガタ幼虫が少なかった」。おとな「こどもたちが泥だらけになってきばった」、「こどものに重労働させたが、かえって良かったか?」。上空にオオタカとトビ現れる。落葉集めも楽しげに動き回ったこどもたちのこまめな躍動、が印象深い例会だった。13:40解散。

⑤ 12月18日(土)「ムササビ観察会」：参加者…こども3人、おとな13人、計16人

16:00宇治川右岸朝霧橋のたもとに集合。上西実さんが、これまで大吉山・朝日山で見た動物たちを配布写真を使って解説。「ムササビとシカは必ず見られます。ムササビは植物食で、冬の主食は常緑樹の葉。四つ折りにしてかじります」。ムササビが食べた葉を見せつつ、「これを探しに行きましょう」と宇治川上流へ。川にはカモとオオバンが群れている。亀石の前で地質学の三上さん「凝灰岩です」。海底に火山灰が降り積もって固まった地層がもち上ってここにある。聞いたこども路肩の石を続々とたく。ムササビの食べ跡探すと1枚の葉。似てはいるが、ムササビがかじったとは言えない。

17:15興聖寺前に戻り、大吉山を上る。17:25-35興聖寺谷でムササビ2頭、親子か?17:

44ムササビ1頭。食べた葉を探す。18:00シカ2頭。上西さん、三上さんとこども、おとなたちは朝日山へ。私は大吉山へ。18:10大吉山展望所の前に金星。その左下に流星。上に木星、左下に1等星、フォーマルハウト？

18:44上西さんとこども、おとなたち大吉山展望所へ来る。19:10道下るとシカ1頭、さらに数頭。19:40朝霧橋たもとでおわりの会。朝日山ではムササビ2頭とシカ10数頭みた、とのこと。皆さんの感想。「ムササビはじめて見た。来年も来たい」、「こんな近くにムササビがいて知らなかった」、「動物見るのは始めて。ムササビの名は知ってたが」、「シカは見飽きた」、「例年ながらシカ多い。石にも関心あることが分かった。何か考えてみよう」（三上さん）。「〈ギュッギュッギュ〉の声はムササビだった」、「シカに食われて実生が育たないのをなんとかしたい」。20:00解散。

(2) 城陽市青谷地区における生物気候

2021年から2022年にかけての秋から冬、冬鳥が少なく、渡りも遅いのが気がかりです。ジョウビタキは10月30日にはじめて見かけ、11月14日にオス、11月18日にメスを見たのですが、その後はさっぱり見られなくなり、1月24日に久々にオス1羽、2月27日にメス1羽を見ました。彼女、彼らはどこへ行ってしまったのでしょうか？ツグミも、12月2日に2羽、12月6日に1羽、12月11日には10羽ほどの群れを見て、やっと来たかと安心していただころ、後が続かず。年明けた1月19日に1羽、1月24日、25日に数羽ずつ見たあと、2月9日まで数日おきに1-2羽ずつ見かけ、19-20日に声聞き、24-25日と姿見て、2月27-28日に声を聞きました。昨年度（2020年-2021年の冬）は、11月6日初見で、例年より多く見かけました。2021年3月25日までたくさんいて、4月22日久し振りに見たのが最後でした。今年度は温暖化や生息地の変化などのため、渡りが遅くなっているのでしょうか？

2021年、ウグイスは2月21日と早く鳴き出し、7月25日まで鳴き続けました。2022年は2月28日が初鳴きでした。2020年は3月2日から7月20日まででした。2021年はキリギリスも6月24日から鳴き出し、10月23日と遅くまで鳴き続けました。2020年は6月28日から9月21日まででした。クツワムシとマツムシは、私が屋久島に行っていた7月28日～8月16日の間に鳴き始め、クツワムシ9月16日まで、マツムシは11月1日まで鳴きました。両者は鳴き始め、鳴き終りとも例年並みでした。

シカは頻繁に動き回り、自宅北のカキ・ウメ畑で被害がひどく、秋に防護柵が設けられました。500m離れた中向河原公園には、2021年11月15日～2022年2月14日の間いくたびにシカの新しい足跡があり、親子の足跡も見られます。2021年秋には、夜、シカの恋鳴きが聞かれ、自宅200-300mでシカ2-3頭をしばしば見かけました。シカが増えていると感じます。イノシシは、昨年度はあちこちに足跡や掘り跡を残していましたが、この1年はすっかり跡が減りました。

(3) 青谷らうんど

2021年度、長谷川中流の浚渫・整備が京都府により行われた。引き続き、下流についても行うよう要請し工事が行われた。2021年2月19日に、「青谷らうんど」の4人と城陽市土木課の2人で調査した長谷川上流左岸を、2022年2月25日に、「青谷らうんど」の6人と城陽市土木課の2人で再び歩き、浚渫・整備すべき箇所を見定めた。長谷川は青谷梅林を流れる川であり、

長谷川左岸・右岸の道と青谷梅林の道をつなぐ回廊を整えていきたい。これを青谷北部の3つの神社、北の旦椋神社、中の中天満神社、南の市辺天満神社ともうまくつなぐ遊歩道を整備していきたい。

2021年度、青谷川南の栗神社周辺や、分断されてしまった市辺梅林を数人で歩いて調査した。これら青谷地区全域を、気軽に歩ける遊歩道として整備していこうと考えている。今年度は城陽市長池まちづくり協議会会長に講演していただき、まちづくり体験を学んだ。また、城陽市の出前講座を数回開き、「城陽市の現状と課題」、「城陽市の農業政策」「城陽市の観光政策」「城陽市の地方創生の取組み」を聞き、議論した。城陽市の方針を踏まえて、わが「青谷らうんど」をどう進めていくか？考えるため、加納宏二さんの講演会を予定している。加納さんはかつて城陽市商工観光課にあって、「梅の郷青谷づくり」事業を立ち上げ、地元青谷の梅農家や城陽市観光協会、市民団体と精力的に相談され、「梅の郷青谷おもしろやましろガイドブック」を残された。散策マップ付きだ。その意欲と行動を受け継ぎたい。